

未来ノート

-202Xの君へ-

ラグビー
リーチ・マイケル

若い人に機会を

お父さんの背中

第二の故郷札幌

もう一度代表に

留学で人生一変したから

ラグビー日本代表主将のリーチ・マイケル(32)は2019年3月、モンゴルの草原にいた。ワールドカップ(W杯)日本大会の開幕が半年後に迫っていた。

——。そんな考えによる留学プログラムの実現を、現地の協会と約束していた。

日本に留学する学生を自らスカウトするためだった。日本の高校で練習し、社会人のトップリーグで活躍する選手に育てば、アジアラグビーの発展につながる

モンゴルのラグビーは弱く、練習環境も整っていない。それでも磨けば光る人がいる。スカウトしたダバジャブ・ノロブサマブー(17)はレスリングの経験があり、180センチを越す身長と手足の長さが魅力的だった。4人きょうだいの末っ

子。移動式住居のゲルに住んでいた。「家族の生活を助けたい」というハングリ—な気持ちは成長の支えになると思った。

大相撲の横綱白鵬ら、モンゴル出身力士を見て、「体が強い。ラグビーをやったらいい選手になる」と考えていた。日本代表の遠征でアジアを回った時、散歩しながら経済的に恵まれない人々の暮らしも目の当たりにしていた。

リーチ自身も、留学で人

生が一変した。15歳のころ、ニュージーランド(NZ)の高校から札幌山の手高校に。日本を代表するアスリートになりたいま、こう思う。「僕が日本に來られたのは周りがチャンスを作ってくれたから。僕も若い人にチャンスを与えたい。経験を伝えたい」

昨年12月、リーチは8人の選手らと一緒に「JiNZ Zプロジェクト」を立ち上げた。人材の「ジン」、さらに日本とNZの国の頭文字から名付けた。チャリティイベントの開催、ラグビーに限らない学生スポーツの支援など五つの柱を掲げる。中でも留学支援は大切な事業だ。「JiNZでサイクルを作りたい」。持続可能な流れになるまで走り続ける覚悟だ。(野村周平)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。



①リーチ・マイケルと手を合わせるモンゴルの留学生のダバジャブ・ノロブサマブー(右)

②子どもにせがまれ、サインをするリーチ・マイケル=2018年1月、大分県別府市

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。